
レグラム・オンライン

リモコン(黒)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レグラム・オンライン

【Nコード】

N2818BA

【作者名】

リモコン（黒）

【あらすじ】

VRMMOのゲームが珍しくもないこの世の中、俺は初めてVRMMOのゲームを買うことができた。期待に満ちた起動。

しかし、俺を待っていたのはデスゲームの世界だった。こんな聞いていないぞっ！？
生産スキルを選んでしまった彰人は、この世界で何を起こすのか…

駄作ですが、読んでいただけると嬉しいです。

やじじいでもある日常（前書き）

開いてくださって、ありがとうございます。

自分の気が向くままに書きました。

急展開など、注意してください。

とくにでもある日常

「それじゃ、入ってくるわね。」

戸締りに気をつけるのよ?」

「子供じゃないんだからわかってるよ、母さん。」

まったく、出かけるたびにこんなことを言われてたら

流石に少し、いらつきを感じる。

しかし、それで切れるほど子供ではない。

これは俺のことを思って言ってくれていることが分かっているからだ。

「本当、ごめんね。」

どうしても断りきれなかったのよ。

明日には帰ってくるからね。」

「うん、近所づきあいつて大事だからな。」

でも旅行か…おみあげよろしく。」

「わかった、とびつきりおいしいもの買ってくるから期待して待っててね!」

そう言い残し、元気よく部屋を飛び出していった。

もうすぐ40代だというのに、何とも元気な人だ。

どんなものを買ってくれるのだろう、と期待を寄せつつ

俺は自分の娯楽を楽しむことしよう。

娯楽、というのも今日発売のゲームが届いているんだ。

その名もレグラム・オンラインという新型ゲーム。

オンライン、という名の通り多人数参加型ゲームなんだが

それよりも特徴的なのが、VRというものだ。

電気信号をいじり、まさにその世界にいるかのような感覚を味わわせてくれる。

そこでは、たとえば体重が100を超えていようと、

100メートルを10秒で走ることだって可能になる。

まあ、実際には頭がすっぽり入るヘルメットのようなものがかぶってるだけなんだが。

そんなわけで最近のゲームといったらVR方式の物が多い。

母さんが外へ出たことを確認すると、

先ほどの言葉を思い出した俺は鍵をかけて、自分の部屋へと急いだ。

「おお、こいつがレグラム・オンラインか……」

amazonから届いた段ボールの中を見ると、
思ったより大きなパッケージが出てきた。

パッケージには可愛いらしい女の子と凛々しい男の子が
二人で武器を構えていた。

ファンタジーといったところに、少しだけ期待が膨らむ。
実は、VR方式のゲームをするのはこれが初めてなんだ。

今まで友達に話しだけは聞いたことはあったが、
俺が夢見ていた二次元へ行くのとは少し違うようだ、残念と言わざ
るを得ない。

時計を見ると時刻は8時30分、朝ご飯はすませておいた。

「いよいよ、か……」

ヘルメット型の機械にソフトを入れ、

ついに初めての起動をした。

ウィーンと旧世代のゲーム機みたいな音がする。

段々と意識が朦朧としてきた

ヤリコでもある日常（後書き）

どうぞしょうか。

文法的批判など、お待ちしております。

始まりの部屋（前書き）

少し、短いでしょうか。

駄文です。申し訳ありません。

始まりの部屋

次に目が覚めると、真っ白な世界だった。

周りには何も無い。

「ここ……どこだ？」

「ここはアバタールームだよっ！」

背後から突然子供の声が聞こえる。

振り向くと、ウサギのような生物がいた。

「うわぁっ！」

「その反応は傷付くなぁ。」

不思議の国のアリスに出てくるウサギのようだ。

しかし、実際に見るとなかなか不気味だ。

「まあいいや、ここではこの世界の君を決めるから、真剣になつてね。」

やり直しはできるけど、その場合はお金がかかるからね。」

なるほど、しかし何一つ決めていない。

考え込んでいるうちに、目の前にパソコンの画面の様なものが見れ

た。

この世界での俺の姿を決める様だ。

こうみても芸術には自信がある。

さあ、どんなイケメンに作ってやる……う……？

……ざつと見るだけで30を超える項目がある。

とりあえず目を選択すると、更に4項目ほど選択肢が出てきた。

選択も、用意されてるのではなく、自分でいじらなければならないみたいだ。

……面倒だ。軽く予想するだけでも約120もの中からすべてを選ばないといけないらしい。

「ああああああつ……！面倒だ……！

おいつさぎ、簡単に決めることはできんのか!？」

早くやりたい俺はいつもの5倍程焦っている。

何が悲しくてこんなキモかわ系動物と一緒にいなければならんのだ。

ウサギは一つ、ため息をついてこちらをバカにした目で見ている。

この野郎……ほんとにキャラクターなんだろうか。

「君、説明書とか読まないタイプだろ。」

右下を押せば自分の姿そのままにベースができるよ。」

呆れたウサギの姿をみていらつきつつ、

右下を見ると確かにシンクロと書いてある。

押すと自分の姿そっくりになった。

「おお、時代は進化したな。」

「君はいつの世界の人だよ……」

うるさい、ゲームなんてあまりしないんだよ！

そこからいじること30分。

遂にイケメンが完成……しなかった。

そこにあるのは俺の姿をさらにひどくした物。

……俺の中の何かが冷めていくのがわかった。

「もう、いいか。もうさ、いいや。」

……絶望したっ！！ゲームでさえイケメンになることを許されないことに絶望したっ！！

もう一度シンクロボタンを押し、ベースの状態になる。

そのまま、完成のボタンを押した。

「おや？そのままの姿じゃないか。

まあ、一番動きやすいかもね。

次は職業を決めてもらおうよ。」

そう言われて出てきたのは、いろいろな服装の俺。

ざっと見ても数え切れないほどだ、50……いや、1000はある。

「ささ、選んじやってよ。自分の好きな物を選んじやっていいんだよ。」

そうは言われてもなかなか決めかねる。

ふと、一つの職業が目にとまる。

「こいつは……」

なぜだろう、みているだけで心臓がドクドクする。

「それは鍛冶屋、

冒険者の旅を支える者

材料に魂を入れ、形を与える職業さ。

それを極めた時、その者は創造主と呼ばれるだろうね。

それにするかい？」

「ああ、気に入った。理由は特にないが、とても気に入った。」

突然強力な閃光が起こり、目の前が真っ白になった。

十秒を過ぎた頃だろうか、視界が戻ってくる。

ふと、下を見ると俺は鍛冶屋の服装へと変わっていた。

「それじゃあ、この世界を楽しんできてよ。」

できるものならね

「えっ、どうゆづっ!?!?」

理由を尋ねようとしたら、また強力な閃光が起こった。

遭遇とオカマ(前書き)

すこし無理やりです。

申し訳ございません。

遭遇とオカマ

「うっん……？……っは！？」

田舎のにおいがする。

ここは……草原？

においまで再現されてるのか……最近のゲームすげえふと、あたりを見回すと近くに大きな白い壁がある。

どうやら町のような。距離で大体300メートルほどか。

とりあえずあそこに向かおう、と思ったが、突然ゼリー状の生き物がポン、ポン、と出てきた。

「す、スライムか！？うわ、きめえ……」

俺がこう思うのをヘタレだと思っ人がいるかもしれない。

だが考えてみてほしい。

1メートルほどのプルプルしたのが、何匹も跳ねてるのを想像してみてくれ。

しかも、良く分からない液を飛ばしながらだ。

どうだ？きもいだろう？

俺はそれをまじかに感じてるわけだ。スタッフは何を考えているのだろう。

しかし、モンスターを目の前にやることといったら一つだ。

「思いっきり、なぐるっ！！」

俺は生まれてから3位に入るほどのストレートを繰り出した。

「うおおおおおおおっ！！！！」

ド真ん中だ、はずれはしない。

俺は勝利を確信しながら、それでもパンチをめり込ませた。ぷにゅ、と猫の肉球を触ったかのような音が出た。

モンスターの上に表示されるダメージ量を見る。

そこには、大きく書かれた一の文字。

俺は逃げ出した、しかし回り込まれた。

良く見ると5匹に数が増えている。

「落ち着け、話せばわかる、な？そんなことで人を殴っちゃだめだぞ？」

決死の説得もむなしく、5人がかりで襲いかかってきた。

タコ殴りだ。劣勢とか、おされぎみとかのレベルじゃない。文字通り、タコ殴りにされている。

ああ、母さん、先立つ不幸をお許してください……

「あんだ、何やってんの!？」

どこからか飛んでくる声、そしてそれを追いかけるように風が吹いた。

頭の上を白い物が通り過ぎていく感覚がする。
ふと、上に顔を上げると、スライムたちが飛んでいる。

「あんたね!？」

生産職業で、しかも武器も持たずに5体相手に勝てると思ってんの!
!?

ほんと、バカじゃないっ!？」

天使かと思ったら刀を持った、毒舌な男でした。
しかし、助けてくれたことにはわりはない。

「助けてくれてありがとう、ほんとに助か「早く武器を装備して!
!」なにそれ?」

「あんだ、説明書もよんでないの!?
頭ん中でメニューから武器を装備する想像をする、急いで!」

スライムが集まってきてる。急ごつ。
あー、開けゴマ〜、おお、開いた!
そこには小さめのハンマーがあった。装備つと。

「おお、いきなり手にひらに……」

「感動はいいから、来るわよっ!」

数は7、なぜ増える……??

草むらに隠れたようだ、スライムが見えづらい。
感覚はモグラたたきだ、出てきた奴から叩いていく。

「おつと。」

右から飛んできた。それを半身で避けながら、スライムの飛ぶ方向と逆方向にハンマーを振る。

空中で動きは取れないようで、自分からハンマーへ当たりに来てくれる。

ぶちゅ、と水分を抜いたスライムを握りつぶす感覚がした。

ダメージは…18か、基準がわからないから何とも言えないな、。

落ちたスライムにもう一度ハンマーでつぶす。

今度は7、さつきよりも低い。

しかし、スライムは光となって消えていった。

「おお、倒した！！クックック、所詮俺の敵ではなかったか。」

ってこんなことをしてる場合じゃない。あつちを助けにいかないかと思っただけをみると、最後の一匹がちょうど光になって消えていった。

「おそい！スライム如きに手こずってんじゃないわよ。」

俺の仕事は認められないようです。

それにしても、こいつ男だよな？

もしや、オカマかっ！？

遭遇とオカマ（後書き）

終わり方が良くわからないっ!!!

どこで区切ればいいのか…

衝撃の事実。(前書き)

頭の中で先の話ばかり考えてしまって手元の話が進まない……

衝撃の事実。

突然助けしてくれたオカマに、なぜか説教を受けている。しかも正座をして。

「あなたね、武器も持たずに一人でなんでモンスターに攻撃なんてほんつとバカじゃない!？」

「いや……でも、スライムだったし……」

「言い訳をしない!! 大体、そうやって見た目で決めつけるが駄目なのよ。」

このゲームはね、同じレベルのモンスターとタイマンをして、ギリギリ勝てる設定なの。

それなのに、始まってすぐ5匹も同じレベルのモンスターと戦うなんて正気の沙汰じゃないわ。」

なんで、ゲームでオカマに説教を受けているんだろっ。

オカマが珍しいのか、それとも説教されてる俺を見ているのかは分からないが、

めっちゃ人が俺を見てる。10000人ぐらい見てる。え? 何これ怖い。

そして、みている理由が後者だった場合、俺はこの後どうやってこの人の輪を抜け出せばいいんだ。

ゆでダコのように顔を真っ赤にすればいいのか? それとも顔さえ見せずに全力ダッシュをしようか。

クソ、せめてここが出発地点じゃなければ俺も甘んじて説教を受けただであろっ。

そんなことを言ってる場合ではない、とにかく、早く説教を終わら

そう。

「と、とにかく、一度街へ行かないか？
ほら、人も見てるし。」

できるだけ周りの人に聞こえないよう小さな声で教えてやった。

「え？ちよつと、なんでこんなに……？
い、急いで抜け出すわよ！」

さわやかなジャーニーズ系の顔を真っ赤に変え、恥ずかしそうにつぶやいた。

まじで気がつかなかったとは、どんなけ説教に集中してたんだよ……
とにかく、急いで人の輪からぬけだそう。

「おい、走るぞ。」

「わかってるわよ、あんた足遅そうだからしっかり握ってるのよ」

と、いわれ手をつかまれた。

強い力で無理やりたたされる。

痛っ！！足がしびれてやがる。

だが、オカマはそのことに気づかない。

結果、どうなるがわかるだろうか？

「痛い痛いっ！！ちよ、ちよつとまって」

「うるさいー！」

「ぎゃああああああつー！ー！」

脚がしびれた状態で全力ダッシュはないだろ

ついたところは洋風のカフェ。

全体的に白色で、さわやかな印象を受けた。

「助けてくれてありがとう、俺は竹島風徒っというんだ。」

しまったっ！！と思ったがもう遅い。

「……今のは聞かなかったことにしてあげるわ。プレイヤーネームは？」

「フ、フウトだ。あんたは？」

「リン、よ。」

名前までもか。こうなるとオカマなのは自覚症状ありだな。

「てか、なんで助けてくれたんだ？」

今一番の疑問を投げかけた。

これでギルド勧誘とかだったら断ることはできないからだ。だが、俺はギルドに入るつもりはない。すべての人に平等に武器を売ってあげたいからな。

「はじめは、素手って珍しいなって思っただけだったわ。でもね、みてたら全然ダメージ与えてないじゃない。で、気になって調べたら、鍛冶屋じゃない。

それでね。私って侍って職業をしてるんだけど、刀ってのはこぼれが激しいのよ。だから鍛冶屋を探してたの。」

「だけど、鍛冶屋ぐらい探せばいるんじゃないのか？」

「知らないの？ ネットでは鍛冶屋って地雷職業ナンバーワンって言われてて全然いないのよ？
鍛冶屋が作る武器より、モンスターがドロップする武器のほうが強いしね。」

「何…だと…」

「でも、いないはいないで大変なのよ？
武器の手直しや、ドロップアイテムの買い取りとかがしてくれなくなるしね。

でも、作る武器が売れないってわかってるから自分からなる人なんてほとんどいないのよ。」

俺が選んでしまったのは、地雷職業だったようです。

衝撃の事実。(後書き)

今更ながら主人公の名前を出してなかったことに気がついた。

面白い小説の特徴って、なんなんですかね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2818ba/>

レグラム・オンライン

2012年1月11日05時51分発行